

モダニティと近代化

社会変化と社会学的思考—理論の20世紀と21世紀

犬 飼 裕 一

はじめに：近代について語ること¹⁾

「社会学はなぜ深刻な話ばかりをするのか？」とある心理学者に尋ねられてハッとしたことがある。格差に差別、いじめ、暴力、精神疾患、自殺。もちろんそれらの重要性について否定する必要はないが、他のテーマはないのか。あるいは人々を勇気づける社会学というのはできないのか。

おそらくこの問いは、社会学の当初からの知のあり方に関係しているに違いない。社会学は人々が日常に接しているながら通常は気づいていない何らかの原理を発見して、そこから「まったく別様に見える状況」を人々に提示することで成り立ってきた。人々が「常識」だと信じていることをそのまま言葉にだけでは、「社会学」にはならない。そうではなくて人々の常識では思いつかない視点を持って来て、奇抜で斬新な社会像を提示する。

そんな社会学の性格は、もちろん有意義であり、多くの人々に新たな発見の機会を提供する。しかし、同じような「発見」ばかりを続けていると、次第にマンネリ化してくる。特に深刻な困難を毎度同じような深刻さで語り続けていると、深刻な陳腐化が起こってくる。

また「自由な学問」を標榜する社会学は、その「自由」ゆえにむしろ不自由になっていくともいえる。つまり、だれもが自由に研究分野を選ぶならば、結果として多数決的な帰結が待っている。社会学の教員は、「社会学は自由な学問ですから卒論のテーマも自由に決めてください！」とゼミの学生に説明した結果、毎年同じような一群のテーマの卒論を指導することになる。毎度「いかにも」といったテーマばかりである。その結果、専門家として「こんなテーマを学生と語り合いたい！」という自由は失われることになる。

そんな体験が重なってくると他の人々はどうなのか？と見まわしたくな

る。口頭ではあまり深い話はしにくいようである。それでネット環境を探し回っているといろいろな意見に出会い、共感させられる。

たとえば社会学者の片桐新自は、2000年に、「現在、漠然とした「社会学人気」は若い人たちにあるようだが、そこで期待されている社会学は本来の社会学のあるべき姿からかなりかけ離れているような気がしてならない」(片桐 2000:179)と書いていた。同じ人物が、2015年には、「社会学不人気時代の到来か？」という一文を自身のホームページに掲載している(片桐 2015)。

「人気」という言葉で片桐が考えているのは、おそらく広い社会科学全般やメディア言論界(そんなものが今でもあるとして)での社会学の声望のことなのだろう。2000年当時のそれらを思い浮かべると、人気を博していた人物やテーマがいろいろ思い浮かぶものである。しかし、それらも繰り返されるうちに陳腐化してしまったのだろう。

勝手な深読みを許していただくならば、社会学は独自の斬新な視点で人々が見たことのない社会の側面を鮮やかに切り取るのが身上なのだが、実際には多くの人々の毎度変り映えのしない言説が埋め尽くしている。決まり文句やいつものパターン。どんなに斬新な物言いや視点でも、毎度毎度繰り返されていると飽きてくる。

「社会学不人気時代」というのは、そんな月並言説が埋め尽くしてしまい斬新さを失った状態のことだろうか。もしもそうならば、社会学はその当初から掲げていた理念の副作用に目下直面していることになる。つまり「広い視野」や「自由」を過度に掲げることは、実は「奇抜で斬新な社会像を提示する」ことを排除してしまうのである。誰もが意見表明できるようになり、その結果として誰もが多数決に従わざるをえなくなる。

誰もが自由に意見を表明していると実感する結果、そこには人々が同意した秩序が生まれていく。そんな全員一致の秩序への違反は、一方的で自分勝手な権威者が押し付けてきた規律への違反よりも強く憎まれる。外から一方的に押し付けられる秩序ならば、少しぐらい違反しても問題はないが、自分たちの合意で作り出した秩序は最優先で守らなければならない。すべての参加者全員の連帯責任。境界のない無条件の「自由」は、実は逃げ場のない義務や不自由をもたらしてしまうのである。

おそらくこの問題は社会をめぐる知のあり方が、大きく変わってきたことと関係しているのだろう。以前の人々は、いうならば「上から目線」で

抽象的な社会について語っていた。たとえば「近代(モダニティ)」という概念が典型で、世界中の社会の在り方を一括して評価するという特権的な立場がすでに暗示されている。そこで無条件に前提となっていたのは、全世界的(グローバル)で理論的な知を探求する人々にとっての「近代」と、現実に社会の変化を体験している多くの人々の上下関係であった。

まさにここで日本の社会学は他の学問分野と共に、一般の日本人と対面することになる。ヨーロッパ由来の学問を深く学んだ人々と、それとは比較的關係の薄い一般の人々との出会いである。このことは、たとえば歴史学にあって先鋭化する。日本近世史家の倉地克直は、西洋史家の阿部謹也が展開した「世間」論について次のように書いている。

「西洋史家の阿部謹也は、個人を基礎とした西洋の社会に対して、個人が曖昧な日本の人間結合を「世間」と呼んだ。現在でも「世間」という言葉はよく使われるが、その意味内容はかなり漠然としているし、多義的である。阿部は、仮説的と断わりながら、「世間とは個人個人を結ぶ関係の環であり」、「長幼の序」と「贈与・互酬」という二つの原理によって構成される集団、と定義している。[中略]「世間」の[互酬]性(相互に贈答する関係)を指摘する点は納得できるとしても、なんとも歴史性が薄い。近代日本の知識人たちが個人として立ち向かった壁が、総じて「世間」として超時代的に投影されているように感じられて仕方がない。」(倉地克直 2008:263-264)

西洋人は個人主義であるのに対し日本人は集団主義。まさに少し以前に流行した議論である。それは「西洋人」の現実であるというよりも、共有されていた価値であったというのが正確だろう。そもそも、人々は現実がそうではないからこそ、特定の理念や価値を尊重する。自立した個人であれと哲学者が命じる社会は、大半の人々がそうではないからその種の要求が意味をもつのである。

「近代日本の知識人たちが個人として立ち向かった壁」というのは、まさに異なった伝統にある知識を必死に受容しようとした人々が突き当たった「壁」なのだろう。もちろん、その種の個人はおそらく理念上のものであって、ヨーロッパ人たちの現実からは遠い。ヨーロッパの哲学者が古くから「個人」の自立を説いたのは、現実のヨーロッパ人がそうではなかったからである。

日本が西洋から輸入した社会科学には最初からきわどい問題が含まれて

いた。それは、社会をめぐる倫理の問題と科学の問題が境目なく混同されていたことによる。いうまでもなく、その種の混同はオリジナルのヨーロッパ人たちの評論にも生じていた。

しかも、倫理の問題は時代によって大きく変わっていってしまう。つまり「近代日本の知識人たちが個人として立ち向かった壁」もまた不変ではない。その結果、在来の議論が陳腐化し、人々の関心はより具体的な問題に向かうか、あるいはもっと「人気」がある問題に向かうことになる。

そんな中で評価の変動にさらされてきたのが社会学であった。その時代の関心に自由に対応しようとする社会学は、まさに変動そのものの中心にあったというべきだろう。ある時期には高い人気を誇り、それが過ぎると失墜する。そんななかで学問として独自の成果を蓄積出来てきたのか。他の社会科学とは異なった独自の視点や方法が確立できたのか。そんな問いに直面すると、社会学は長い自問にとどまらざるをえない。

分野としての「社会学」は今後も存続できるのか。特に、社会学の理論は存続できるのか。社会学は理論として生き残れるのか。そのために何か新たな展開を可能にできるのか。

本稿の根幹は社会学の理論が衰弱しつつあるという現状認識にある。そして、衰弱しているのならば、その理由は何か。理由を特定できたならば社会学の理論は再生できるのではないのか。

このことは社会学という学問の開始からの重要問題に関係している。19世紀後半、社会学が独自の学問として自立した時、「社会」を理論的、認識論的な立場から再考することこそが独自性であるとされた。常識的な日常から離れて、当時の哲学が考えたような認識論や理論から再考するならば、常識や日常では不可能な独自の新たな認識が可能になると考えられたのである。

現に、社会学の草創期には、それまでにない斬新な視角が登場し、社会科学の全領域にわたって興奮状態がもたらされた。それまでは人間が高貴な理念や経済的な利害で動いていると考えられたのが、個々人の内面によっても行動していることが明らかになった。人間は「理性」や「経済」という力で一方的に動かされる操り人形ではなく、それらも含めた様々な要因によって多様に揺れ動く存在であることが視野に入ってきたからである。

1. 近代の正統と異端

「社会学はなぜ深刻な話ばかりをするのか？」

しかし、一見深刻そうなわりには、以前から同じようなことばかり言っている。社会学の理論が長い間に陳腐化してしまった原因の一つは、基準そのものが変わってしまったことにあったのではないか。その背景には、国際社会の構図が大きく変化したことがある。以前の日本の社会学者は西洋と日本の「近代」を比較することに集中していた。

たとえば、富永健一は西洋に出発した歴史としての西洋近代と、日本のような「非西洋」の「後発的」な社会の「モダニティ（近代性）」が区別されるべきであると主張していた。つまり西洋近代に発した抽象的な「モダニティ」が、日本のような「非西洋」で「後発的」な社会で別様な働を示すと考えるわけである（富永 1990：28）。

まさに夏目漱石が有名な講演「現代日本の開化」（1911年）でいった、「内発」と「外発」のテーマである。それによると、西洋の開化は内発的であり、日本の現代の開化は外発的である。漱石は巨大な西洋近代に対して小さな一国で対面する日本社会の困難を強調した。以来、日本の知識人たちはアジアでいち早く「近代」を実現した日本社会の優位性を確信しながら、同時に不安を感じ続けてきた。日本は近代化したが、日本の近代はなにか偽物で異常なのではないか。

しかし、突き放した視点から見直すと、この種の議論にはすでに出発点から重要な判断が下されていることに気づかされる。「現代日本の開化」を論じる漱石は、当時の日本が「開化」——近代化——していると判断している。漱石の問題はそれが「外発」なのか「内発」なのかである。しかし、日本が近代化しているという判断は、日本以外の多くの国々が近代化していないという判断を暗黙の——そして自明の——前提としていた。「外発」で近代化した日本には「内発」ではない負い目があるかもしれないが、それでも近代化したことには変わりがない。

おそらく「近代」をめぐる日本の言説には、そこで語られなかった問題こそが重要なのだろう。自分たちは近代化したが、そうではない人々が大量にいる。しかし、それら「大量」はあくまでも無視される。そして、この「大量」を無視することによって社会学の理論もまた進んでいた。「外発」なのか「内発」なのか？あるいは、日本の近代化はヨーロッパのように内

発的な歴史をふまえていた近代化とは違っていたのか、どうなのか。そんな問題の立て方は富永が論じていた1990年ごろにはまだ意義を持っていたのだろう。

それから時が流れ、世界情勢も大きく変わってきた。そんな中で日本の「近代化」論も次第に複雑化してきたようである。新たに意識されるようになったのは、近代化した日本社会自体の中にも格差が生じているのではないのかという問題であった。フランス革命に象徴される「近代化」は人々間の格差をなくす過程だったのではないのか。しかも、「外発的」に近代化した人々はより豊かな生活を享受し、そうではない人々は除外されるのだろうか。

除外された人々は近代ではなくて、特定の人々だけが近代というのはどういうことなのか。ただし、この種の二分法が今日意味をもつのかというと、難しい。理由は簡単で、日本以外の多くの国々が「モダニティ（近代性）」を体験しつつあるからである。

以前の日本の社会学者は、アジアで近代化しているのは日本だけであり、日本は特別なのだと明言しなくても、それを自明のこととして議論をしていた。しかし、状況は大きく変わったのである。

1990年代までは、「アジア小四龍」という言葉が盛んに用いられ、韓国や台湾、シンガポール、香港が日本に続く経済発展、近代化で注目を集めていた。そして、21世紀に入って中国の経済発展がまさに世界情勢にとって最大の問題になる。この三十年ほどのアジアの動態は、「近代化」論にとって残酷なまでに状況を変化させてしまった。もっといえば、いまさら近代化を論じても仕方がない、特に日本の近代化などはすでに傍流の問題でしかないということになっているのかもしれない。

旧小四龍、韓国の台湾のシンガポールの香港の近代化は、当然それぞれ特殊であり、また「巨大龍？」である中国の近代化やモダニティ、タイの、ベトナムの、ラオスの「モダニティ（近代性）」は各々同じであるはずなどない。逆にいえば、漱石や富永のような近代化論は、「日本」以外の社会の近代化を考えに入れていなかったという弱点をはらんでいたことが改めて明らかになったのである。日本と中国の近代化やモダニティについて考える時、どちらがより「外発」で、どちらがより「内発」なのか？ などという問いを思考実験的に立ててみればよい。

当然のことだが、その種の比較にはたいして意味がないだろう。理由は

簡単で、「正しい近代」とそうではない近代の違いなど、多様な近代化の下では意味がないからである。あるのは各々別々で多様な個別の近代ではない。

こうして考えてくると、以前の日本の社会学は強度にナショナリズム的で、しかも自民族中心だったことが明らかになってくるのではないだろうか。おそらくこの点こそが20世紀末の鋭敏な理論家たちによって在来の近代化論、モダニズム論が批判の対象となった原因なのだろう。ナショナリズムは他者との差異を意識する思想だからである。そして、近代やモダニズムは、近代と前近代、モダンとそれ以外を際立たせてしまう。現に、西洋という際だった他者と直面した日本のナショナリズムはまさに明確な形で表現されてきた。

結局のところ、漱石や富永のような議論は、圧倒的な存在であった西洋近代によって触発されたナショナリズムとしての近代化論であった。

そして、強大な他者との直面によって生じるナショナリズムの思考は、しばしば自己と他者という二分法によって考えようとする。しかも、この種の二分法は多くの場合、価値判断を含んだ二分法に向かいやすい。つまり、正統と異端、中心と辺境、本物と偽物、オリジナルとエピソード、大小、優劣、正邪、等々である。

西洋の近代が確固とした存在として特定されるならば、それに対して「他者」として対面する日本の近代はこの種の二分法で裁かれるのを避けられなかったのかもしれない。西洋の人々、ヨーロッパ人やアメリカ人が自分たちを一体のものとして「西洋近代」の正統性を強く押し出して来るならば、それに対面する「日本近代」はひどく不利である。

地理的な領域の面積の点でも、人口の点でも、経済的な実力の点でも、軍事力の点でも圧倒的に不利だった現実を思い出すならば、東アジアの島国が強くなり自己主張をすることは難しかったのだろう。

この問題は考えるほどに、時間が経過するほどに、ますます困難になってくるのである。21世紀の複雑すぎる状況、たとえば新自由主義流の開発論とその批判者たちの様々な議論を観察すると、「日本の近代が置かれている位置」といった議論自体が、ひどく古臭い前提に依拠していることが明らかになってくる。古臭い前提が古臭くなってしまった原因こそが、まさに世界の状況の変化であった。

真顔で「日本の近代が置かれている位置」について問うていた人々の意

識には、日本が世界の中で特別な位置にあるという一種の自負心があったのだろう。しかし、21世紀も20年を経過して、日本の近代化というのは、他にもたくさんある多様な近代化の単なる一例であるにすぎなくなってしまった。これはもしかするとこれまでの日本知識人にとってかなり辛い現状認識だったのかもしれない。

2. モダンの「脱構築」とは何だったのか？

近代やモダンに正統や非正統を設定する二分法思考は、結局のところどれが本物でどれがそうではないのか？という問いを延々と繰り返しているにすぎない。この種の思考は、二分法の思考をどこまでも突き詰めていくことでしかない。結局どこかに正しい「近代」や「モダン」があるというわけである。

しかし、現実の21世紀世界は多様な近代が入り乱れ互いに影響を与え合っている。そんな状況を語る言葉に「グローバル化」がある。しかし、今日のグローバル化はイギリス発の「産業化」や、フランス発の「革命」や、アメリカ発の「フォードイズム」や「マクドナルド化」だけではない。

非西洋発の多様な消費文化も「グローバル化」の主要な要因となっている。たとえば、ロンドンやパリやベルリンに、いまいったい何軒の寿司屋があるのかは調査するに値するが、ニューデリーやイスタンブール、シベリアの辺地の小都市にも寿司屋はたくさんある。しかも目下急速に増殖しつつある。ただし、新鮮な魚介類を必要とする「スシ」は、各地でほぼ例外なく高級な料理である。つまり、それぞれの地域の人々は大きな出費を当然のこととして寿司屋に行っている。すると、これらの都市で「スシ」を食べる現地の人々は、「内発」と「外発」のどちらの近代を暮らしているのか。

もちろん、「スシ」は今日の「グローバル」世界に暮らす人々のごく狭い一面でしかないのだろう。しかし、「スシ」が一面的であればあるほど、それ以外の要素の「グローバル」を想像する手掛かりが得られるだろう。日本人には日本発の「スシ」のような要素に注意が向いやすいが、他の地域の人々にとってはまた別な「グローバル」があるはずである。

今日の世界は、昔の日本の知識人が考えていた二分法——近代の西洋と近代化する日本、そして近代とそれ以外——を置き去りにして、すでにはるかに異なった状況になっているのである。このような違いを今日の社会

学理論は、ほぼ反映できていないし、消化できていない。それでは、今日の日本社会に暮らす人々の現実感から遊離していることの言い訳は困難なのである。ともかくも、今日の日本人——と日本の社会学理論家——は、「世界」がいつの間にかはるかに変化してしまっている状況に直面して啞然としている。あるいは、沈黙せざるをえないのが現実なのである。

すでにかなり以前になってしまったが、「脱構築」という言葉が流行したことがあった。近代化、モダニティに先行するとされたフランスの知識人たちが流行らせた用語で、近代やモダニティは今までとは異なった「段階」にあるというわけである。しかし、実際には世界的な——グローバルな——現実の方がはるかに先行している。

難しい込み入った説明を排して、「脱構築」を単純化して、「近代化の自己言及」と定義しなおすならば、多くの問題は平易に理解できるのではなからうか。つまり、自分たちこそが一般の人々を近代化するぞ！と主張していた人々自身が「近代」を基準として逆に審判される事態である。近代は本当に当人たちが誇るほど「近代的」だったのか。むしろ、古臭い身分社会のような力関係が温存されているのではないのか。古い時代の勢力が「近代」を利用して既得権を強化しているのではないのか。現実のそんな状況は、まさに多くの人々にとって困難な現実だったのだろう。

しかし、自分自身が主張していた理念が自分自身に当てはめられて評価される。まさにそれこそが、私見では、21世紀の社会学の知である。それは自己言及の知として、今まで以上に今後の社会科学の知のあり方を決定していくべきである。ようするに、自分自身がどうなのか？という問いこそが主題となる社会知である。

そんな自己言及性の社会知を理論化したのがドイツの社会学者ニクラス・ルーマンであった。ルーマンの考える近代（モダニティ）は、歴史上の現象というよりも、むしろ人類に共通の思考様式に基づいて考えられている。ルーマンの考える社会では、人々は特定の決まりきった相互関係を延々と再生産する。それは結局のところ、人々が感じている意味の世界の問題である。人々が感じている「意味」が互いに関連しあい、それぞれの比較的自立した「システム」を構成していく。社会学が探求する社会とは、結局のところ人々の「意味」なのだということになった。

人々が感じている意味の世界。まさに、ここにこそ20世紀後半の哲学、そして社会学理論の焦点があった。20世紀後半の理論は、哲学を中

心として「意味」の問題に集中した。意味の世界への注目は人々の主観による「意味」がすべてであるという理解に行き着くことになる。ルーマンの議論を子細に観察していくと、まさにこのような「意味」についての理解、そして人々が互に実感する「意味」についての考察が作り出している「システム」を実感する。

人々は確かに特定の意味を帯びたシンボルによって互いに言及しあうことで身の回りの様々な「システム」を作り出している。そこには、もちろん「近代」と呼ばれる一連の現象も含まれる。「近代」は、それ自体がシンボルとして多くの人々を動員し、統合することで、それを生み出したヨーロッパを越えて世界中の人々に影響を与えてきた。明治以来の日本の議論も、もちろん含まれる。近代をめぐる「内発」と「外発」、正統と異端、本流と傍流といった意味論上の区別も、当然同じ構造であった²⁾。

しかし、人間の社会はルーマンが論じるような問題だけなのだろうか。意味をめぐる解釈を議論の中心に据えるいわゆる「意味学派」の議論には、一つの注意点がある。それは、論者自身が「意味」があると考えた問題以外は当人の考える「システム」に入っていないという問題である。その結果、ルーマンが論じる「システム」と同じく、ルーマン自身の議論もそれ自体を根拠として循環していた。

もちろん、論理の上でも自然で、人間が自己言及・自己準拠的な思考をする生物であることを強調したならば、やはり人間の一人であるルーマン自身も自己言及・自己準拠的な思考するのが当然で、自然だからである。

ここではルーマンの議論をみてきたが、いわゆる「脱構築」と呼ばれる思考上の手続きは、ルーマンと同じく意味と解釈をめぐる議論から出ることがない。それは確かに人間の認識上の特性を視野に入れた議論として、重要な問題の多くを指摘していた。しかし、人々の関心の外にある広大な領域を放置しているのは事実だろう。しかも、人々が他者と対面することは、自分とは異なった関心を持ち、異なった価値を尊重する人々と対面する機会でもある。

最もわかりやすいのは、時間の経過である。ようするに歴史学の視点で、今現在の人々が重要であると考えた価値を、過去の人々は共有していなかったという事実に出発する。あたりまえのことで、人々の価値観は常に変化している。時間の流れの中で常に変化している価値観は、人々が日常的に感じる「意味」や「解釈」を容赦なく変化させてしまう。

現に、21世紀最初の十数年の世界の動きは、近代をめぐる日本国内での議論を根底から変えてしまった。「強力な西洋近代に孤独に対面する日本」などという思考は、今では全く説得力がない。今現在「対面」しているのは、中国を筆頭にいくつものアジア諸国であり、今後さらに多くの国々が対面することになるはずである。

少し意地悪な言い方をあえてするならば、日本だけは特別という考えで近代を論じてきた人々の根拠はすでに失われており、はるかに多様な世界が実現して久しい。近代と、モダニティの問題はいまのところ一点に収束するのだろう。

すなわち、中国台頭の近代をどうやって理論化するのかという問題である。ルーマン流に「中国のシステムは自己言及的に再生産されている」と判断するのはおそらく正しい。他の社会と同じく「中国」もまたそれ自体を根拠として自己産出しているからである。しかし、正しいからといってそれで多くの人々の関心が満足できるわけではない。そんなことはむしろ当たり前だからである。

3. 進歩は死んだのか？

「近代」や「近代化」をめぐる議論は、20世紀の末以来、様々に展開してきた。この三十年ほどの間に印象的だったのは、近代化と不可分に結び付けられてきた「進歩」という概念が、いったん打ち捨てられたかのように思われたことである。

アメリカの外交史・国際政治の専門家ヒュー・ディ・サンティス（国務省官僚を経てワシントンの国防大学（National War College）教授）は1996年の著書『進歩を超えて』で、次のように書いていた。

「ヨーロッパでは、進歩というイデオロギーは死んだ。アメリカでそれが消滅するよりずっと以前のことだ。（中略）しかし、二十世紀が終わろうとしているいま、人間が道徳的に向上しつづけるとはもはや思われぬが、かりに物質的な進歩は果てしなく続くと思っても、いまなお世界に蔓延しつづける病気、貧困、人間の残忍さといった妖怪を押しえつづけることができると思われぬ。科学・民主主義・工業化は、イマヌエル・カントや啓蒙思想の哲学者たちが予言したようなグローバルな平和や、幸福、人間の平等をもたらさしはしなかった。……」（サンティス 1997：201）

この種の著者は、アメリカ合衆国にあって、いわゆる「国益 (national interest)」を最優先にする人々のはずである。ところが「近代」や「進歩」の元締めを自負するアメリカの国益を代弁する人物が、「進歩というイデオロギーは死んだ」と宣言する。これはかなり印象的である。まさにそれこそが20世紀末の理解だったのだろうか。ヨーロッパに続いてアメリカでも「進歩」は死んだのだろうか。

もちろん、この種の論者が得意とするレトリックをそのまま受け取る必要はないだろう。彼らは自国の読者に注目され、人々が危機感を共有するために本を書いているからである。しかし、外交や軍事という高度に時事的な問題を論じる著者がレトリックを駆使して同時代の人々に「進歩」の死を訴えかけようとしていた事実は意味深い。それは時代の雰囲気の一部を物語る証言として記憶されるべきなのだろう。

社会学よりもはるかに「今」——いわゆる「国益」——に集中する分野の人々が「進歩」を見放していた状況は、それ自体で意味をもっていた。世界の先端を行く人々はだれも「進歩」なんて言わない、というわけである。進歩というのは古臭い。しかし、世界の先端を自負する人々が進歩を否定する事態というのは、なにやら奇妙である。ただし、そんな奇妙な状況がごく当然のこととして理解されていたのはなぜだろうか。直前の人々が必要以上に強く「進歩」を強調していたからなのだろうか。

この種の議論の根拠はそれほど目新しくはない。すなわち、物質的、産業的發展は続いているが、人間は倫理的に向上していないし、いっこうに幸せになってもいないし、むしろ「格差」ははるかに広がっているという理解である。現に、今日の社会学で有力な議論がこれである。いわゆる「グローバル化」をめぐる議論の多くがこの型を踏襲している。

むしろ、社会学は「深刻な話」が得意であるだけに、20世紀末の雰囲気をより色濃く保存しているともいえる。

しかし、社会学から目を転じて広く見回すと、近年目に付くようになりつつあるのは、「進歩」や「啓蒙」への見直しや再評価である。依然として人類の未来は暗いとする悲観的な観測は強い影響力をもっているが、そうではない希望的な観測も登場しつつある。

そもそも20世紀の末に「進歩」や「進歩思想」が失墜した原因は、なによりもソビエト社会主義が崩壊したことにある。当時、世界中で「進歩」を信奉する人々の多くがソビエト社会主義の支持者であり、そんな

人々にとってあらゆる思考の根拠は広い意味での「社会主義」だったのだが、それが無残に崩壊してしまった。

その種の人々が「人類にはもはや進歩は期待できない」と考えたのは自然なことだったのかもしれない。まさに希望を失って自暴自棄の状態である。しかし、なぜ人類の進歩がソビエト社会主義と同一視されなければならないのかという問いは長く無視されてきた。そもそもロシアの地に実在したソビエト社会主義というのは、本当に近代的だったのか。このように考えてくると、今日の社会学が「近代」について考える場合の問題が、まだまだそれほど検討されつくしているわけではないことが見えてくる。

そもそも、中央集権の独裁政権が残虐な形で国民を無理やり「近代化」させる制度が本当に近代的だったのか。密告を奨励し、秘密警察によって反対派を弾圧する政権が実現しようとしたのは、どのような形の「近代」だったのか。1991年に崩壊し、あとにみじめな残骸をさらしたソビエト社会主義は、まさに社会学の具体的事例として貴重であった。

それらは、むしろいかにも「近代」を口真似したレトリックで飾り立てただけの、単に古くからの独裁政治の延長だったのではないか。ようするに「啓蒙専制君主」と何が違うのか。あるいは、彼らが考えた「近代」というのは単に特定の特権階級だけが豊かになってそれ以外の奴隷階級を無条件に搾取する制度のことだったのではないか。ただし、今日にいたっても社会学はこの問題に正面から向き合っていないのではないか。

このように考えてくると、20世紀の末からいろいろ登場してきた様々な議論が、それぞれに「近代」をどう考えるかとい点で印象的なイメージを提供してきたことがわかってくる。それぞれの立場の人々が自分たちに都合のよい「近代」をそれぞれ考察して自己正当化を行ってきた。

アメリカでも、「ジャパンアズナンバーワン」で有名なエズラ・ヴォーゲルの議論は、日本の政治家や経営者たちを喜ばすための議論ではなくて、アメリカの有力者、特に政権担当者に反省をうながすためであった。また、過大な軍事費が歴史上の「大国」の覇権を失わせたと強調したポール・ケネディ「大国の衰退」も、目的は同じである。そして、ソビエト崩壊の時期に世界中の注目を集めたフランシス・フクヤマの「歴史の終わり」は、アメリカの勝利というよりもアメリカに対する批判者が失われてしまった状況を警告していた。冷戦の勝利に慢心するアメリカ人に警告することを意図していたのである。

これらの議論が共有していた暗黙の前提は、「世界の中心はアメリカであり、世界史はアメリカがどうなるかによって規定される」という思想であった。19世紀の主流をなしたヨーロッパ中心の進歩主義は解釈替えをされて、アメリカ中心イデオロギーになった。そして今日では「グローバル化」と呼ばれているのである。

グローバル化をめぐる近年の議論は、結局のところ冷戦に勝利して覇権を握ったアメリカをどう評価するのかという問題に帰結する。つまり、アメリカの覇権を肯定的にとらえる人々は「グローバル化」に賛成し、そうではない人々は非難する。ただし、それらの中にも立場はいろいろあって、それぞれに多様な議論を展開しているのは事実である。

たとえば、肝心の「グローバル化」の中身を観察すると、実はすべてがアメリカ発ではないという事例が多い。フランスやイタリアなどの「高級ブランド」による「ブランド品」の人气が興味深い。ヨーロッパに以前からあったそれらの高級品の会社の製品をもてはやし、大量購入することによってそれらが巨大産業化するきっかけを作ったのは、「バブル景気」時代の日本の消費者であった。日本発の流行が経済成長著しいアジア地域に波及し、「グローバル化」し、今ではヨーロッパに逆輸入されている。

しかも、先ほどの例でいうならば、今ではロシアの東部、シベリアの小都市にも多くの寿司店があり、それらの多くは日本人の経営ではない。それらの寿司店の繁盛には、おそらく「アメリカ」は何も関与していないはずである。

グローバル化は特定の国籍というよりも、特定の文化が何らかのきっかけによって爆発的に普及拡大することを特色としている。そして、どこもかしこもといった調子に均質化していくような印象を与えるようになる。まさにグローバル化が非難されるのはこの点で、各地の文化の独自性や伝統が失われてしまうとされる。

しかし、この種のグローバル化批判には、決して明言されることのない、密かな選民意識が含まれていることも見落としてはならない。つまり自分(たち)は文化の独自性や伝統をグローバル化によって踊らされる一般人よりもよく知っており、それらの貴重さについても承知している。一般の人々は外国由来の安手の大衆消費文化に夢中だが、自分たちはその無価値さや危険性を知っているというわけである。それらの「文化」や「伝統」というのは、多くの場合19世紀以前の、あるいは近代化以前の極端

に不平等な社会に起源がある。つまり、特別な教育を受けた知的エリートの時代、それ以前ならば、王侯や貴族だけが真価を知るといった常識が行きわたっていた時代を強く連想させる。

私見ではグローバル化をめぐる批判言説がしばしば行き詰ってしまう理由は、それらが明言されない部分を多く抱えすぎているからである。正直な意見は言えないが、とにかく世界中を席卷しているグローバル化はけしからんというわけである。議論の飛躍を承知であえていうならば、この種の行き詰まりは、単にグローバル化批判だけではなくて、社会学理論全般についても言えるのではないだろうか。

しかし、「グローバル化」への批判が日本の社会学に提示した問題は、実際にはより深い次元にあったともいえる。つまり悲観的な状況を強調することで世界の趨勢を批判することの背後には、過去に結びついた既得権を失うことへの抵抗が隠れている。「(正しい)文化」や「伝統」という名で呼ばれるものは、しばしば過去においても力を持っていた勢力の既得権の別名でもある。

社会学でおなじみの言葉を使うならば、いわゆる「マクドナルド化」を非難の言葉として使う人々は、「正しいフランス料理」や「本当の日本料理」が侵されており、多くの人々がそれらの真価を理解できなくなるといった形の議論を行うことがよくある。しかし、「正しいフランス料理」や「本当の日本料理」が確かに素晴らしい文化であり、伝統であることは認めるとしても、それらがどういう社会層に「正しく」愛されてきたのかを考えると問題の別の側面が見えてくる。

その場合、「マクドナルド化」がもたらした世界全体の利便化や貧しかった地域の栄養状態の向上といった利点は無視される。それはある人物の欠点ばかりを探し出して常時非難しつづけている態度を連想させる。そもそもその種の行動を続ける人物が多くの人々に尊敬され、愛されることは多くないのではないだろうか。

現に社会学は「社会」についてその欠点を探し出すことについては古くから習熟しており、しばしば習熟しすぎてしまったのではないだろうか。結局、社会学、特に社会学理論は、必要以上に悲観的な「社会」を強調することによって短期的な世界的名声を得たのだが、そのことによって長期的な信頼を失ってしまったのではないか。もしもそれが正しいのならば、社会学は根本的な軌道修正を迫られているのではないだろうか。

おわりに：再び進歩と啓蒙？

社会学が行き詰まり、そして不評——「社会学不人気時代」(片桐新自)——の原因は、社会学が20世紀の世紀末を卒業できていないからではないのか。20世紀、とくに後半の社会学理論は18－19世紀を、進歩主義を否定しすぎてしまったのではないか。そして、社会学全般はひどく偏った知になってしまっているのではないか。その一方で、様々な問題はあったにせよ、深刻な「矛盾」にたびたび陥ったにせよ、総体として人類は進歩してきたのではないか。以前よりもはるかに多くの人々に「成長の果実」が行きわたるようになったのではないか。

心理学者スティーブン・ピンカーは世界的ベストセラーになった「21世紀の啓蒙」と題する2019年の本で「啓蒙主義」について書いている。

「こうして改めて証拠を挙げて啓蒙主義という事業の成果を見てみると、啓蒙主義の理念がたんなる甘い希望ではなかったことがよくわかる。啓蒙主義という事業は間違いなくわたしたちの役に立ってきた。だが、「偉大な物語はめったに語られない」ということなのか、啓蒙主義の勝利は語られてこなかった。そのせいで、勝利を可能にした理性、科学、ヒューマニズムといった理念も正しく評価されていない。それも、何らかの合意された過小評価がなされているというのではなく、もっとひどいことに、今日の知識人はこれらの理念を無視し、あるいは疑いの目を向け、時には軽蔑さえする。だが、私がこれから提示するような適切な評価がなされれば、啓蒙主義の理念は実のところ感動的であり、刺激的であり、崇高でさえあり、つまり生きる理由と呼ぶにふさわしいものだと思われるはずである。」(ピンカー2019：31)

おそらくそれは「今日の知識人」と、多くの一般の人々の見ている世界の違いを示唆している。社会学は「今日の知識人」の代表として活躍してきた。しかし、今日の世界中の多くの人々は「啓蒙」の果実を享受している。彼らは「正しい文化」などにはたいして関心がなく、「伝統」の根源であるとされる昔の社会に戻りたいなどとは考えない。そもそもグローバル化がこれほどの速度で世界中に普及した原因は、無数の一般人が熱狂的に歓迎したからである。

おそらく社会学が軌道修正するためのヒントは自己言及にあるのだろう。つまり、自分自身は今現在、今ここで「啓蒙」の果実を享受していな

いのか。あるいは、「近代」は自分自身にとって無条件に悪だったのか。それは通常の日常生活を送る多くの人々の理解と、そうではない人々の理解の関係に基づいている。

こうして考えてみると「今日の知識人」が考えている「グローバル化」と、多くの人々が体験しているグローバル化はかなり異なっているのかもしれない。

ただし、ここで注意しなければならないことは、「今日の知識人」、つまり「正しい文化」や「伝統」についてよく知っている人々の考えを全否定する必要などまったくないことである。あれかこれかという二分法は、おそらく人間の脳の機能に基づいており、人は深く考えることがないとすぐに二分法で判断してしまう。本来、物事を二つに分けて選択する必要はないのである。

知識人には多くの人々が信じている常識を疑い問い直すことで、一般の人々が作り出している関係性、さらには全体としての集団、全体としての社会が陥る困難を防ぐ役割が期待されてきた。わかりやすい例でいえば多くの人々がバブル経済に熱狂し狂奔する状況の下で、「こんなことは長くつかない！」と警告することは知識人の役割である。ただし、警告が度重なると多くの人々の実感から遊離してしまう。

重要なのは「社会」をめぐるできるだけ多様な思考を展開することなのだろう。単純な二分法の社会観も不毛だが、単一の原理ですべてを評価しようとする考えはさらに不毛である。不毛というよりも、危険と呼んだ方がよいだろう。二分法や単一原理が不毛である理由は、それを論じている自分自身がその論理を当てはめてはたしてどうなのかという問いが欠けていることにある。

先に論じたルーマンが行った理論構成にあって、何よりも画期的だったのは、「近代」をめぐる多くの人々の言説そのものが近代的なのかという問いであった。それは「近代」と近代を論じる論者自身をめぐる自己言及性を愚直に広く適用していこうとする探求であった。「社会」について自分勝手にいろいろなことを問う本人自身は何なのか。これこそが社会学にとって今日の最も重要な問題なのである。

他方で、社会学を離れて、「近代」や「モダニティ」をめぐる広い領域の議論について考えてみると、20世紀末までの議論を経て、今日登場しているのは、1. おもに環境問題を重視する文明社会・グローバル化批判と、

2. 人類の努力によって多くの問題が解決できるという新たな進歩主義思想の二つであるように思われる。ここでは最後にこれら二つの動きについて簡単に触れて終わりとしたい。

アメリカの進化生物学者ディヴィッド・スローン・ウィルソンは、進化論の復権を主張する。様々な誤解と偏見に包まれてきたダーウィンの進化論は、今後の世界において共生の可能性を提示していると考える³⁾。「新実存主義」を掲げて日本でも多くの読者を獲得しているドイツの哲学者マルクス・ガブリエルは「新啓蒙主義」を提唱する。「実存」で時代を席卷したハイデガーの哲学の欠点は倫理に無関心なことであったが、今日新たに倫理を強調することで新しい啓蒙主義が実現するべきなのだというわけである(ガブリエル 2021)。そして、「国境なき医師団」の創設メンバーだったスエーデンの医師ハンス・ロスリングは、世界を覆いがちな悲観論とは別に、「事実だけによる思考(ファクトフルネス)」を提唱する。ロスリングによると、確かに世界人類が置かれている状況は以前よりも確実に改善している(ロスリング 2019)。

彼らによると、紆余曲折はありつつも、悲惨な現実を経つつも、人類が全体として長期的に、「進化」しており、「新たな啓蒙」は有意義であり、それは「事実(ファクト)」としても検証可能なのである。もちろん、これらの議論については懐疑的な立場からの再検証が重要であることはいうまでもない。しかし、全否定的な態度でこれらを否定することも、また再検証が必要であるのは当然だろう。

「批判」を主旨とし、悲惨な現状を強調する社会学にも意義はあったが、今後新たに、世界の人々に希望を与える社会学の可能性も探ってみる必要はあるにちがいない。それは人間の思考を全体として調和のとれたものにするところでもあるからである。多くの人々が救われる希望は、社会学にとっても今後の希望となるのかもしれないからである。それは社会学という知を今後有意義なものとして生き残らせる方策でもあるのではないだろうか。

注

- 1) 「近代」と「モダニティ」を表題に掲げる本稿は、2018年の拙稿をふまえている(犬飼2018)。「近代」と「モダニティ」は、元来英語のmodernityの訳語なのだが、日本語の訳語の中で様々な立場によって使い分けがされるなか

で、互いに意味が微妙に異なってきた。おそらくそれは、本稿で後に論じるように、modernityをめぐる多様な立場を代弁していたのだろう。互いに参照される反照性の中で「近代」は「モダニティ」として再把握され、さらに「近代」として再確認されるのだろう。そんな反照性による目が回るような関係性を意図的に表題化するために「モダニティ」と「近代化」を並べて表題とすることにした。

- 2) ニクラス・ルーマンの議論については、犬飼2021を参照されたい。また、この節のタイトルと、ルーマンについての議論は、今田 1987に多くを負っている。
- 3) ウィルソン2020。ウィルソンによると、ダーウィンの進化論の根幹は適者生存の生存競争ではなくて、むしろ多様な存在の共存関係を強調することにあった。

「進化論の世界観を肯定的に確立するためには、まず社会進化論の問題に満ちた歴史を振り返らなければならない。ダーウィンの名のもとで、貧困の放置、不妊手術の強制、人種差別、あからさまなジェノサイドなどの由々しき社会的不正義がなされたのであれば、進化論の領域はまぎれもなく危険地帯であることになる。しかしその種の社会進化論の描写はほとんどが神話であり、真の歴史ははるかに興味深く複雑だ。ダーウィンの理論を正しく理解すれば、協調に焦点が置かれていることがわかるだろう。ダーウィン等は、最初からその点を明確に述べていた。」
(ウィルソン2020：28)

文献（参照順）

- 犬飼裕一 2018：「歴史について語ること：歴史認識と社会学」、『社会学論叢』第191号（日本大学社会学会）
- 犬飼裕一 2021：「ルーマン、歴史と意味学派——「近代社会における近代的なるもの」（1990）を読み解く中で——」、『研究紀要』（日本大学文理学部人文科学研究所）、第101号
- 片桐新自 2000：「社会学について考える：社会学の再生を求めて」、『関西大学社会学部紀要』32
file:///C:/Users/%E7%8A%AC%E9%A3%BC%E8%A3%95%E4%B8%80/Downloads/KU-1100-20000925-05.pdf
- 片桐新自 2015：「第32章 社会学不人気時代の到来か?」、『社会学を考える』

(著者ホームページの文章)

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/socio.html#ch32>

倉地克直 2008：『徳川社会のゆらぎ』、小学館

富永健一 1990：『日本の近代化と社会変動』、講談社学術文庫

今田高俊 1987：『モダンの脱構築：産業社会のゆくえ』、中公新書

ヒュー・ディ・サンティス 1997 (原著1996)：『進歩を超えて：相互主義論序説』、伊藤憲一訳、文芸春秋

ハンス・ロスリング他、2019：『FACTFULNESS (ファクトフルネス) 10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』、上杉周作・関美和訳、日経BP

スティーブン・ピンカー 2019：『21世紀の啓蒙：理性、科学、ヒューマニズム、進歩』上下、橘明美・坂田雪子訳、草思社

マルクス・ガブリエル 2021：『つながり過ぎた世界の先に』、大野和基インタビュー、高田亜樹訳、PHP新書

ディヴィッド・スローン・ウィルソン 2020：『社会はどう進化するのか：進化生物学が拓く新しい世界観』、高橋洋訳、亜紀書房